

「野沢菜のルーツは天王寺蕪」 四天王寺の境内で 絆伝える記念碑



春分の夕方、妻に誘われ四天王寺に散歩がてらお詣りした。この近くに20年住んでいるが、実はお彼岸のお詣りは初めてである。

五重塔や金堂のある中心伽藍の東側に、高さ約1.8m、横2.4mの記念碑が目に入った。

記念碑には「野沢菜原種旅の起点」と刻まれ、野沢菜のレリーフと大阪から長野までの伝来のルートが紹介されている。

1756年（江戸中期）、野沢村の健命寺の住職が京都に遊学した際、天王寺蕪のおいしさに感動し、種子を持ち帰ったのが栽培の始まりと伝えられている。長野は高冷地だったので、カブの部分が大きくならなくて葉や茎が立派に育ち現在の野沢菜が生まれた。（実際は、DNAが異なるから、別物らしいが）

一方、天王寺付近が発祥の地とされる天王寺蕪は、与謝蕪村が「名物や蕪の中の天王寺」と詠んだほど全国にその名を知られ、多くの人に好まれたが、明治後期に虫の被害などで姿を消した。

衰退していた天王寺蕪が市民グループなどの尽力で復活。平成13年ごろ、天王寺蕪の普及を目指す「天王寺蕪の会」の関係者が野沢菜の言い伝えを知り、野沢温泉村を訪ねたのが交流のきっかけ。以来、野沢菜が伝わった道を歩いてたどる「野沢菜伝来の街道（みち）ウォーキング」に参加して交流を続けてきた。記念碑は平成28年11月建立された。

この記念碑を見て「600キロもの距離を結んだ縁だね。日本最古のお寺で不思議がいっぱい」と、「17時過ぎたよ。夕焼けを極楽門から見なきゃ」と歴女の妻。

春分・秋分の日には極楽門の真ん中を夕日が沈む。野沢村からきた住職もこの光景を見たのだろうか。石碑の野沢菜の部分は盛り上がり彫られ手触りが気持ちいい、今日は野沢菜漬でお茶漬けでも食べようと思う。

引用参考資料

* あべの経済新聞

* 大阪市天王寺区役所公式サイト

（文責 勤労者支援 井上範之）

